

国際協力時評

多様性と可能性 協力隊経験が拓く自分と世界の未来



看護師、博士(医学)

こまがた ともこ
駒形 朋子

1997年度(平成9年度)1次隊/
看護師/パキスタン

宮城県仙台市出身。長崎大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程修了。看護師として4年間の臨床経験後協力隊に参加。帰国後大学院で学び、現在まで熱帯地域での公衆衛生や看護に関する研究・教育を続けている。長崎大学熱帯医学研究所、千葉大学大学院看護学研究科、日本看護協会、東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究所を経て、現在は国立国際医療研究センター国際医療協力局で看護を中心とした国際協力事業や研究に従事している。

COVID-19の流行は、リアルな交流が遮断された一方で感覚的には世界が近くなり、また国際協調の重要性を強く感じる機会にもなったのではないだろうか。本稿を読まれる方々の多くは、オンラインで用事が済もうが現地に行きたい気持ちを募らせていることと思う。

私は、高い志ではなく、ただ好きで国際保健、国際協力の仕事を続けている。いろいろな国で人々に会い、日常生活を研究するのが好きなのだ。そのきっかけは、協力隊だった。イスラーム教を基盤としたパキスタンでの毎日は、それまでの価値観を軽々と超える不思議なことばかりで、それが私の人生を変えるスイッチとなった。

私は首都の国立病院に看護師として配属され、パキスタン人の家族と生活していた。不思議なことに出会わない日はなかったが、最大の

衝撃は、着任初日の上司からの看護師の心得、「勤務中に笑顔を見せない、男性の患者さんに優しく接しない」であった。異なる社会の文脈では、自分の当たり前がまったく別の意味になると学び、異文化感受性を得たことは、何よりの財産になったと思う。また絶え間ない(ときには疲れる)井戸端会議のおかげで、イスラームの女性の考え方や行動を日常レベルで理解でき、またウルドゥー語を流暢に話せるようになったことも、その後の人生の大きな彩りとなった。帰国後、大学院で学び研究の道に進むとは思ってもよらなかったが、まさかの選択肢をあえて選ぶような度胸も、協力隊経験の賜物かもしれない。

現状で活動する隊員のみなさんには、まず大きな称賛を送りたい。不安定や予想外な状況での経験は、うまくいってもいなくても必ず力になる。はからずもパンデミックが証明した不可逆のグローバル化はますます加速し、相互の価値観を尊重し協働することが不可欠になるだろう。そんな世界で、隊員経験を持つみなさんの可能性は無限に広がっている。楽しく過ごし、元気で帰国されることを心から祈る。